

サポーター養成プログラムの策定に向けた試案 —サポーターに求める資質・能力と振り返りシートの活用—

時津 啓（島根県立大学）

A workshop program for supporter training : Supporter's quality-ability and the use of reflective papers

Kei TOKITSU

1. はじめに

対人援助研究「子ども子育て・教育福祉研究部門」は、対人援助に関わるサポーターの養成を内在している。この研究ノートではその養成の一部である「振り返りシート」について、その位置付け、作成過程、意義、そして具体的な活用例を提示する。

本ノートの概要は以下の通りである。第一に、サポーター養成プログラムの位置づけとその特徴を確認する。第二に、振り返りシートの作成過程を示す。そして第三に、サポーター養成プログラム案を提示し、最後に課題と展望を述べる。なお、本研究ノートは2019年3月末時点のものをベースとしており、本プロジェクトが現時点（2019年9月）で進展していることをことわっておく。

2. サポーター養成プログラムの位置づけと特徴

本部門の研究プログラムは三つの柱を有している。そのうち、サポーター養成プログラムは下記

の表のように位置付く。A. と B. の基礎研究を踏まえて、その研究成果を C. のプログラムとして具体化することにその特徴がある。子ども子育て・教育福祉部門を総括するプログラムと言えよう。

上記から明らかなように、本部門が有する対人援助という概念はinterpersonalと直訳できるものではない。なぜなら、人と人之间、あるいは人と人の相互という意味に還元できないからである。むしろ、人と人之間、あるいは人と人の相互で行われる行為、中でもcommunicationに焦点を当て、その行為を援助するものであると考えられる。簡潔に言えば、コミュニケーションの援助こそ、本部門が言う対人援助であろう。

3. 振り返りシートの作成過程

3. - 1 予備的实践

教員に求められる資質・能力を手がかりに暫定的に以下の資質・能力を取り上げた。

- 客観的判断力
- 自己教育力

Table 2-1 サポーター養成プログラムの位置づけ

A. 子ども・子育て	子育てが家庭のストレス、不安の現状把握、その支援プログラムの開発と検証
B. 特別支援	(1) 発達障害、知的障害への効果的な指導支援、支援者との共有 (2) ストレスが生体に及ぼす影響について、心理生理学的研究 (3) 高齢者施設における音楽サポーター養成プログラムの作成と施行 (4) 食育支援プログラムの開発と検証
C. サポーター養成プログラム	地域住民、中高生を中心としたサポーター養成プログラムの策定

- 受動的・共感的関わり
- 積極的関わり

実際にサポーターの候補でもある在學生へ次のような授業を行った。

STAGE1 対人援助の原理・原則の学習

キーワード：人権

対象：道德教育論、受講者17名（2年生）

STAGE2 対人援助に関する実践

子育て場面における事例研究

対象：道德教育論、受講者17名（2年生）

資料：

今井康雄（2009）『教育思想史』有斐閣、2頁
 3歳になったばかりの男の子がいる。その父親、母親があなたである。子育ては楽しいが、時には息抜きも必要である。そう考えて、1日だけベビーシッターを頼み、久しぶりに友人とコンサートに出かけることにする。息子には前もって十分言い聞かせ、彼も留守番することを納得した。ところが、さて当日になってベビーシッターが来ると、彼はダダをこね始める。あなたが出かけようとするとき泣き出す。あなたはどう感じ、考えるだろうか。いったん約束したのだから、今になって守れないのは不当である。このような筋の通らないわがままに屈するのはこの子のためにならない。外出する自分の意志を押し通す必要がある。
 いざ、留守番となって悲しくなってしまったのだろう。約束という大人の理屈を子ども相手に持ち出しても、理解できないだろう。子どもの気持ちを考えることが重要だ。一応なだめて、それもダメなら家にいよう。

結果：

ほとんどの学生（13名）が「B」を選択しており、国際比較における研究成果とも一致した。一般的に日本の親は「B」を選択する傾向にあり、ドイツ等では「A」を選択する傾向にある。

もちろん、問題はどちらかを選択したのか。そこにはない。むしろ、その理由である。2名の学生のコメントを一部引用する。

男子学生①：

確かに、Bの意見だと甘えにつながり（ママ）、子どもの自律をじゃま（ママ）している。でも、大人の理くつ（ママ）で子どもを見てしまうと、子どもの世界が大人と同じになってしまうと思う。

女子学生①：

一見、Aの方が厳しく、大人に向けて成長させることができていると思うが、冷たい印象を受ける。3歳の子どもも、いずれ大人になるから甘えはきんもつ（ママ）というリクツ（ママ）もわかるが、理不人（ママ）なことでも愛情を注ぐことの方がまずは大事なことのように思う。

分析・考察：

いずれの選択をしたにしても、必要なのはその根拠して「子ども」の存在があるかどうかであろう。双方の選択は一見正反対のように思えるが、今井が言うように、ここには「子どものため」という共通の原理も存在する。

対人援助、とりわけ子どもに関わるサポーターの資質・能力として、上記の原理に集約される共感性や受動性は不可欠なものだろう。さらに言えば、その前提として、積極的に子どもに関わること、さらには上記のような二者択一を迫られた際、双方の共通項を見出すといった客観的判断力も不可欠である。

上記のことから、まずは子ども学研究、教育行政等が示す対人援助にかかわる人材の資質・能力をピックアップし、その検討が不可欠であろう。

3. - 2 学術図書・学術論文等の検討

まず過去10年に絞り（2008年～2018年）、主に教員養成、保育士養成に関する学術図書、学術論文を選定し、教員、保育士に求められている資質・能力をさした¹。

次に、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」、広島市教育委員会「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」も参照した²。教育行政の動きと学術成果の双方から、いわゆる教育・保育分野に

おけるスペシャリスト養成に関わる資質能力を選定した。

最後に、前節で提示した対人援助概念、本プロジェクトのコンセプトを踏まえ上記の作業から選定した資質・能力のうち、スペシャリストとは異なり、本学が示す対人援助と重なるサポーターに適合する資質・能力の選定を行った。

以上の作業によって、子ども・子育てサポーターに必要な資質・能力としては次のものを抽出した。

- (1) 客観的判断力
- (2) 自己教育力

- (3) 受動的・共感的関わり
- (4) 積極的関わり（コミュニケーション）
- (5) 関連機関との連携
- (6) 悩み、問題の発見
- (7) 言葉使い、マナー
- (8) 地域の資源の活用
- (9) 人権意識
- (10) 子ども子育てに関する基礎的な知識、技能

3. - 3 振り返りシートの作成

これまでの作業、考察を踏まえて、次のような振り返りシートを作成した。

振り返りシート案

		必要な資質能力の指標	自己評価	
項目	項目	指標	講習／実習前	講習／実習後
(1) 客観的判断力		何かの判断や決断をするとき、自分の考えを最優先にする傾向にある	1・2・3・4	1・2・3・4
		友達や先生（上司）に相談して、何事にも取り組むことができる	1・2・3・4	1・2・3・4
		他の人の意見を参考にして、自分の意見を述べたり、行動することができる	1・2・3・4	1・2・3・4
(2) 自己教育力		新しいことに挑戦したり、向上心をもって授業や仕事に臨むことができる	1・2・3・4	1・2・3・4
		他の人の助言を素直に受け止め、自らの行動を振り返り、成長へつなげることができる	1・2・3・4	1・2・3・4
		成功するかわからないことでも、まずは経験したり、挑戦したりしてみることが大事だと思う	1・2・3・4	1・2・3・4
(3) 受動的・共感的関わり		他の人の意見や考えをじっくりと聞くことができる	1・2・3・4	1・2・3・4
		他の人の悩みや不安に気づくことが多い	1・2・3・4	1・2・3・4
		悩んでいる人の気持ちを感じ取ろうと努力し、実際にその人の気持ちを理解したことがある	1・2・3・4	1・2・3・4
		不安に思っている人の気持ちを考えることも少ないから、その人の助けになる行動や声掛けをしたことも少ない	1・2・3・4	1・2・3・4
(4) 積極的関わり（コミュニケーション）		楽しい話を聞くのはよいが、人の悩みや不安については聞きたくない	1・2・3・4	1・2・3・4
		話す相手によって言葉を変えたり、表情を変えて話すようにしている	1・2・3・4	1・2・3・4
		話す相手のスピードや声の大きさを気にしながら話すことが多い	1・2・3・4	1・2・3・4
		初めて会う人でも、共通の話題を見つけてできるだけ話そうと思う	1・2・3・4	1・2・3・4
(5) 関連機関との連携		初めて話す人やあまり話したことがない人とはできるだけ話したくない	1・2・3・4	1・2・3・4
		困ったことがあったら、自分だけで解決せず、専門家や先生に相談する	1・2・3・4	1・2・3・4
		子ども・子育てに関する基本的情報や必要な情報は家庭や行政機関との情報共有が必要と思う	1・2・3・4	1・2・3・4
		子どもの健康や安全に関する情報については、保健所や警察等の行政機関と連携しながらその対応を検討する必要があると思う	1・2・3・4	1・2・3・4
(6) 悩み、問題の発見		友達や同僚の何気ない日常行動の変化に気づくことが多い	1・2・3・4	1・2・3・4
		不登校やいじめなどの問題行動は早期発見が重要であると思う	1・2・3・4	1・2・3・4
		問題の発見も重要であるが、その予防のためにも子どもや保護者の個性や生活している環境を理解する必要がある	1・2・3・4	1・2・3・4
(7) 言葉使い、マナー		信頼関係に基づく人間関係のためには、挨拶が必要である	1・2・3・4	1・2・3・4
		子どもに対することば使いには大人とは異なった言葉使いが必要である	1・2・3・4	1・2・3・4
		子育て中の保護者への働き掛けにはその他とは異なる特有の言葉使いやマナーが必要であると思う。	1・2・3・4	1・2・3・4
(8) 地域の資源の活用		子ども・子育てについて、地域住民が利用可能な施設等を把握している	1・2・3・4	1・2・3・4
		美術館や博物館等、子どもの文化的接触を促す社会教育の施設を理解している	1・2・3・4	1・2・3・4
		地域の施設や資源を活用して、子育て支援に関する資料（リーフレット等）が必要と思う	1・2・3・4	1・2・3・4
(9) 人権意識		人権尊重の精神を理解し、多様な価値を認めることができている	1・2・3・4	1・2・3・4
		子ども・子育てに関するジェンダー（男女差）の問題、エスニシティ（人種上の差異）の問題等を理解し、差別や偏見を理解している	1・2・3・4	1・2・3・4
		子どもの権利について理解し、人権一般との違いを理解している	1・2・3・4	1・2・3・4
(10) 子ども子育てに関する基礎的な知識、技能		子ども・子育てに関する基礎的な知識や技能を理解し、身につけることができている	1・2・3・4	1・2・3・4
		保護者への働きかけなど子育てに関する具体的な事例について、検討・議論したことがある	1・2・3・4	1・2・3・4
		子ども・子育てに関わる人が、実際の子どもに接したり、子どもの遊びと一緒に参加する意義を理解している	1・2・3・4	1・2・3・4

1=そう思わない、2=あまり思わない、3=そう思う、4=非常にそう思う

4. サポーター養成プログラム案

本部門が設定するサポーター養成プログラムは、2本のプログラムで成立している。第一に、理論（究理）編であり、第二に、実践編である。これは広島文化学園大学の建学の精神「究理実践」をモチーフとしている。

4. - 1 サポーター養成プログラム(理論(究理)編)

STAGE1： 理論（究理）

プログラム名	講習／実習	対応する 資質・能力
振り返りシート(事前)の記入	実習	(1)(2) (5)(8) (9)(10)
1. 対人援助とは何か(1.5H)	講習	(1)(2) (5)(8) (9)(10)
2. 子ども子育てプログラム(2H)	前半:講習 後半:実習	(3)(4) (7)(9) (10)
3-1 特別支援プログラム① 発達障害、知的障害(2H)	前半:講習 後半:実習	(3)(4) (7)(9) (10)
3-2 特別支援プログラム② スノーブレン(2H)	前半:講習 後半:実習	(3)(4) (7)(9) (10)
3-3 特別支援プログラム③ 音楽(2H)	前半:講習 後半:実習	(3)(4) (7)(9) (10)
3-4 特別支援プログラム④ 食育(2H)	前半:講習 後半:実習	(3)(4) (7)(9) (10)

1. 2. は必修講習／実習とし、3. については4つのプログラムから1つを選択し、講習を受ける。

4. - 2 サポーター養成プログラム(実践編)

STAGE2： 実践

プログラム名	講習／実習	対応する 資質・能力
1. 来んさいカフェ(2H)	実習	(3)(4) (6)(7) (10)
2. 子ども・子育て支援センター(2H)	実習	(3)(4) (6)(7) (10)
振り返りシート(事後)の記入	実習	(1)(2) (5)(8) (9)(10)

5. おわりに一課題と展望

第4節で提示した養成プログラムは、高校生、大学生を中心にプログラム実施前後に振り返りシートを記入し、そのプログラムの効果を測定するものであった。

しかしながら、これについては以下のような意見も出され、主に2点の課題があると考えられる。第一に、「サポーターとは誰か?」という問題である。それぞれのプログラムで想定するサポーターは異なるかもしれない。あるプログラムでは子育てを実行する父母である。別のプログラムでは大学生や地域の高校生、高齢者施設に勤務するスタッフかもしれない。もしかしたら、これらを特定すること自体が尚早かもしれない。それぞれのプログラムが個別に進む中で、徐々に共通項が見えてくると考えることもできる。しかしながら、プログラムを設定する以上、万人を想定することはできない。本事業がブランディング事業であることも想定する必要がある。それらを踏まえ、より具体的なサポーターの対象となる人材を焦点化する必要がある。

第二に、振り返りシートの活用法についてである。筆者の案ではそれぞれのプロジェクトを網羅する養成プログラム受講前後に実施するというものであった。しかしながら、より細分化した形で利用できるのではないかという意見が出された。具体的には、それぞれのプログラム実施前後で行うというものである。この活用法については、振り返りシートの精査も含め検討し、そのプロジェクト事業に適切な形で質問内容を変更することも可能だろう。もちろん、この変更には資質・能力も含まれるが、その際は本事業のコンセプトと適応しなければならないことは言うまでもない。

以上を踏まえ、以下のような活用例も提示することが可能である。しかしながら、これらはいずれも私案に過ぎない。広島文化学園大学の実情と地域との関連も踏まえた上で、刷新していくことが必要だろう。

●対人援助プログラム案

本プログラムは上述したA. とBから構成され、Stage1～Stage2で構成し、それぞれのStageに3つのStepを設ける。

Stage1 理論と実践の学修

Step1 子ども・子育てに関するHBG対人援助の特徴

Step2 上記表A, Bに関する知識、技能の修得

Step3 上記表A, Bに関する対処法の修得

Stage2 介入と更新

Step4 子ども・子育て支援をめぐる問題の発見（特に地域の固有性）

Step5 関連機関との協力によるコミュニケーションの創出と問題解決（定期的な更新講習も含む）

Step6 地域子ども・子育て支援の質的向上

Stage1 = 研究成果に基づいた支援サポーター講座→資質能力の育成

Stage2 = 支援サポーターによる地域社会への介入と大学での振り返り

（更新講習）→資質能力の持続的な更新

¹ 選定した学術図書と学術論文は以下の通りである。

<学術図書>

1. 林泰成他編（2014）『教員養成を哲学する—教育哲学に何ができるか』東信堂。
2. 教員の資質能力向上委員会（2017）『平成28年改正 教育公務員特例法等の一部改正の解説 一学校教育を担う教員の資質能力向上をめざして』第一法規
3. 市川昭午（2015）『教職研修の理論と構造』教育開発研究所

<学術論文>

1. 青木 哲也他（2018）「教員養成と育成をつなぐ人材育成指標の作成状況調査報告」『福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）年報』8、177-184
2. 竹内恵子他（2016）「親子療育教室実施保育園としての園内研修：職員の共通理解と保育士の資質向上をめざして」『福井大学初等教育研究』（2）、1-7
3. 中平絢子他（2013）「保育所保育における保育士の資質の問題点と課題」『岡山大学教師教育開発センター紀要』3、52-60
4. 藤村祐子（2014）「米国ミネソタ州における新しい教員評価制度の意義：連邦教員政策と関連して」『教育行政学研究』（35）、17-29
5. 前田泰弘他（2018）「主体的な課題解決を目指す保育者育成の体験型教育プログラムの展開」『和洋女子大学紀要』58、165-174

² 教育行政が提示する教員養成に関するものとしては以下を参照した。
文部科学省中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2016/01/13/1365896_01.pdf

広島市教育委員会「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」
<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1522731806244/files/sihyo.pdf>